

# 法然の『往生要集』解釈と良忠によるその継承と深化

——菩提心をめぐって——

下 端 啓 介

## 〔抄 録〕

良忠の作とされる『往生要集義記』では随所に法然の言葉が引用され、法然の『往生要集』解釈がその全体を通して貫かれていると考えられる。法然の言葉や釈書を引用した箇所に関しては、様々な研究があるが、そのような引用文でない箇所については、これまで具体的な検討はなされていない。本検討では『往生要集義記』において、法然の言葉が直接引用されていないが、その意味内容から法然の解釈が関連していると考えられる箇所を取り挙げる。すなわち『往生要集』の「作願門」及び「惣結要行」に

おける菩提心を解説する際、法然の『往生要集』解釈を踏まえてその立場を補足する解説がなされているのである。そこには法然の『往生要集』解釈を継承し、深化させようとする姿勢が見られる。『往生要集義記』のさらなる理解には、このような法然法語の引用がない箇所をも考慮していくことが求められるのである。

キーワード 良忠、法然、『往生要集義記』、『往生要集』、菩提心

## はじめに

法然上人（一一三三—一二二二、以下、全ての尊称略）は、極楽浄土への往生を勧めた源信（九四二—一〇一七）の著作である『往生要集』を契機として浄土門に帰入したという。『往生要集』は浄土宗にとって重要な書物であるが、そこに説かれる思想や『往生要集』に基

づく教義については、浄土宗における研究状況は必ずしも優先度の高いものとなっていないと考えられる<sup>①</sup>。しかし『往生要集』の説示は法然の思想に多大な影響を与えており、それは先行研究によって明らかとなっている<sup>②</sup>。

浄土宗における『往生要集』の註釈書として、まず、法然の四つの著作が現存している。先行研究において、四つ相互の比較や他の法然

遺文との対比から、これら四釈書が法然の思想変遷の中、どの段階に位置付けられるか、或は四釈書がどのような順序で成立したかといったことが議論されている。他の注釈書としては、浄土宗三祖の良忠（一一九九—一二八七）の作とされる『往生要集義記』（以下、『義記』と略<sup>4</sup>）が挙げられる。<sup>5</sup>『義記』は『往生要集』の文言に対して項目毎に順次解説を施すという構成となっており、著者の博覧強記を以て浄土教のみならず通仏教的な用語についても細かく解説されている。教義に関する解説においては、冒頭に法然の『往生要集釈』から長文を引用して法然の『往生要集』観ともいえる説示を挙げている。また随所に法然の言葉の引用が見られ、法然の『往生要集』解釈が『義記』の全体を通して貫かれていると考えられる。

『義記』における先行研究では、法然の言葉が引用される箇所が主として研究対象となっている。大谷旭雄氏の研究では、少なくとも十九回<sup>6</sup>、法然の釈書からの引用文が見られるとし、それらが法然の四釈書の何れに該当するかといった検討がなされている。<sup>7</sup>さらに南宏信氏は、引用文に加えて『往生要集鈔』や『義記』諸本の跋文を検討することにより、古本『漢語燈録』所収の四釈書以外に『往生要集』の注釈書が存在したと指摘する。<sup>8</sup>また那須一雄氏は、四釈書だけでなく四釈書以外の引用で法然に触れている箇所をも検討し、良忠の『往生要集』理解を論じている。<sup>9</sup>法然の言葉や釈書を引用した箇所に関しては様々な研究がなされているが、そのような引用文でない箇所については、これまで具体的な検討はなされていない。

そこで本検討では『義記』から良忠による『往生要集』の理解を見

ていき、直接の法然の引用文はなく法然の言葉が文言上では見られずとも、その意味内容から法然の解釈が関連していると考えられる箇所を取り挙げる。『義記』のさらなる理解にはそのような箇所も含めて十分吟味する必要があると考えられるからである。今回は、二例であるが具体的に示すことにより、今後の『義記』の研究に資することを目指す。

以下では、用例毎に、まず『往生要集』の箇所を挙げ、次にそれに対する法然の解釈を示し、その後に『義記』の説示を述べていく。

## 第一章、「作願門」における菩提心解釈

### 第一節、『往生要集』における説示

『往生要集』大文第四正修念仏の「作願門」の冒頭では曇鸞（四七六—五四二）の『往生論註』<sup>10</sup>を引用して次のように説かれる。

發菩提心者正是願作佛心<sup>11</sup>ナリ。

すなわち發菩提心は仏になろうと願う心であるとし、以降、菩提心について説き明かしていく。

一ニハ明シ菩提心ノ行相一、二ニハ明シ利益一、三ニハ料簡ナリ。初二行相ト者、總シテ謂ハハハ之ヲ願作佛ノ心ナリ。亦名ク上求菩提下化衆生ノ心ト。別シテ謂ハハハ之ヲ四弘誓願ナリ。此レニ有リ二種一。一ニハ縁スル事ヲ四弘願ハ、是即衆生縁慈ナリ。或ハ復法縁ノ慈也。二ニハ縁スル理ヲ四弘、是レ無縁ノ慈悲也。<sup>12</sup>

つまり、菩提心についてその「行相（有り様）」、「利益」、そして「問答」を説くということである。さらに、菩提心の「行相」には縁

事の四弘誓願と縁理の四弘誓願の二つがあるとする。まず縁事の四弘誓願とは、衆生に対して起こす慈であり、或は真実のことわりを縁として起こす慈である。また、一には衆生無辺誓願度、二には煩惱無辺誓願断、三には法門無尽誓願知、四には無上菩提誓願証とも説かれる<sup>17</sup>。次に縁理の四弘誓願とは、特定の対象をもたない慈悲であり、また、あらゆるものは真如・法性を本質としており有・無や垢・浄といった二辺を離れたものであると知って発す菩提心とも説かれる<sup>18</sup>。

「作願門」においては、この縁事の四弘誓願、縁理の四弘誓願の中、後者の優位性を認める文言が随所に見られる。例えば、縁理の四弘誓願を説く中では、

是<sup>ヲ</sup>名<sup>フ</sup>順理ノ發心ト。是<sup>レ</sup>最上ノ菩提心<sup>ナリ</sup>。

と、縁理の四弘誓願を順理の發心と名付け、最上の菩提心とするのである。他の例として、縁事・縁理の四弘誓願を説き明かした後、次のように説かれる。

問。於<sup>ニ</sup>何<sup>シ</sup>ノ法中<sup>ニ</sup>、求<sup>ル</sup>無上道<sup>ヲ</sup>。答。此<sup>ニ</sup>有利鈍二<sup>ノ</sup>差別<sup>ニ</sup>。

すなわち、どのような教えにおいてさとりを求めるのがよいか問い、その答では機根の勝れた者と劣った者に対する二種類の教えがあるとする。この問答の後、『大智度論』等の経論を引用して菩提心を説く例を挙げるが、そのまとめとして割注に

已上六文、是利根人菩提心耳<sup>22</sup>

と、これ以前に説いたのは機根の勝れた者の菩提心であると述べるのである。つまり、菩提心に二種類あるとしながらも、事の菩提心を説かず理の菩提心を説くのである。さらに「利益」の項目において十

以上もの例を挙げて発菩提心の利益を説いた後、問答を設けて次のように述べる。

問。縁事ノ誓願<sup>モ</sup>亦有<sup>ニ</sup>勝利<sup>一</sup>耶。答。雖<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>ニ</sup>縁理<sup>一</sup>、此<sup>レ</sup>亦有<sup>ニ</sup>勝利<sup>一</sup>。

これは、縁事の四弘誓願にも勝れた利益があるかという問いである。つまり、これより前に説かれた数々の菩提心の利益は縁理の四弘誓願についての利益ということである。またその答えにおいては、縁理の四弘誓願には及ばないものの、縁事の四弘誓願にも利益はあると説くのである<sup>24</sup>。このように、『往生要集』では明らかに縁理の四弘誓願に重きを置いていることがわかる。

## 第二節、法然の菩提心解釈

法然は四釈書の中、『往生要集釈』や『往生要集詮要』、『往生要集料簡』に共通して説かれる説示の中で菩提心について解釈している。

その説示とは、『往生要集』大文第五助念方法の「惣結要行」についての解釈であり、林田康順氏の論では「惣結要行B釈<sup>25</sup>」と呼ばれる。

「惣結要行」とは、次章で詳説するが、「往生の要」は何かという問に対して、①大菩提心と②三業を護ることと③深く信じ④誠を至して⑤常に⑥仏を念ずるならば⑦願に随って、決定して極楽に往生するといふ七法を答えるものである。『往生要集釈』の「惣結要行B釈」では次のように解説する。

就<sup>ニ</sup>菩提心<sup>一</sup>、有<sup>レ</sup>事、有<sup>レ</sup>理。文<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>雖<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、若<sup>シ</sup>例<sup>ニ</sup>之<sup>ハ</sup>念<sup>佛</sup>、且<sup>ニ</sup>以<sup>レ</sup>事<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>往生ノ要<sup>ト</sup>也<sup>26</sup>。

つまり、菩提心には事と理の菩提心があり、『往生要集』の中では事と理の菩提心のどちらを往生の要とするかは明言されていないが、念仏に準ずると事の菩提心を往生の要とするということである。

その念仏について「惣結要行B釈」では次のように説かれる。

於念佛<sup>ニテ</sup>行<sup>ハ</sup>、又有<sup>ニ</sup>觀想<sup>ハ</sup>、有<sup>ニ</sup>稱名<sup>ハ</sup>。於<sup>ニテ</sup>二行<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>、稱名<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>要<sup>ト</sup>。故<sup>ニ</sup>次<sup>ノ</sup>答<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>「稱念佛<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>行<sup>ハ</sup>善<sup>ナリ</sup>ト也。」（云云）以<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>往生<sup>ト</sup>要集<sup>ノ</sup>意<sup>ハ</sup>、以<sup>ニ</sup>稱念佛<sup>ヲ</sup>爲<sup>スル</sup>往生<sup>ノ</sup>至要<sup>ト</sup>也。<sup>(27)</sup>

すなわち、念仏行には観想念仏と称名念仏があるが、その中で称名念仏を往生の要とするということである。その根拠として『往生要集』大文第五助念方法の「惣結要行」に説かれる文言を引用する。その文言とは、仏を称念することは行善すなわち積極的な作善だとする文である。ここで、「称念仏」は観想念仏ではなく称名念仏だと法然は捉える。凡夫の往生を目指す法然が観想念仏ではなく称名念仏を往生の要だと解釈するのは、単に道理として凡夫にとって観想念仏が修し難く称名念仏が修し易いからという理由だけではなく、『往生要集』の文言に基づいているのである。『往生要集』において称名念仏を勧める説示はこの他にも見られ、大文第四正修念仏の「觀察門」では、観想念仏と称名念仏を説いた上で

若有<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>堪<sup>レ</sup>觀<sup>ニ</sup>念<sup>スル</sup>ニ相好<sup>ヲ</sup>、或依<sup>リ</sup>歸命<sup>ノ</sup>想<sup>ニ</sup>或依<sup>リ</sup>攝<sup>ノ</sup>想<sup>ニ</sup>或依<sup>ニテ</sup>往生<sup>ノ</sup>想<sup>ニ</sup>、應<sup>ニ</sup>一心<sup>ニ</sup>稱念<sup>ス</sup>。<sup>(28)</sup>

と観想念仏に堪えられない者のために称名念仏を説く。さらに大文第八念仏証拠では

男女貴賤、不<sup>レ</sup>簡<sup>ニ</sup>行住坐臥<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>論<sup>ニ</sup>時處諸緣<sup>一</sup>、修<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>難<sup>カ</sup>

ラ、乃至臨終<sup>ニ</sup>願<sup>ニ</sup>求<sup>スル</sup>ニ往生<sup>一</sup>得<sup>ル</sup>コト其<sup>ノ</sup>便宜<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>ニ</sup>念佛<sup>ニ</sup>。<sup>(29)</sup>  
と称名念仏はどのような機根・状況・条件でも修することができ、臨終においても往生を求めるのに最適であるとして称名念仏を勧める。このように称名念仏について『往生要集』では、往生の要だと言える根拠が種々に説かれている。

これに対し、菩提心については、上述のように事の菩提心と理の菩提心の中、どちらが往生の要であるかという根拠は明示されておらず、『往生要集』の文脈上では理の菩提心に重点が置かれている。ただし、凡夫の往生を基本的立場とする法然にとって、機根の劣った者の往生のためには、理の菩提心といった高度な行よりも易行である事の菩提心の方を往生の要とするのは自然なことである。そこで法然は「念仏に例せば」<sup>(30)</sup>として、『往生要集』の文言に依らず、易行である称名念仏を往生の要とするのに準じて、事の菩提心（縁事の四弘誓願）を往生の要だと解釈したと考えられる。法然は、凡夫に適した易行である称名念仏を勧めるという自身の立場で『往生要集』を解釈しており、そのような解釈には末木文美士氏が指摘したような「強引」<sup>(31)</sup>な側面が見られるのである。

### 第三節、『往生要集義記』における菩提心解釈

前節で述べたように、法然は事の菩提心を選ぶことについて十全の論理を示していない。これに対して『義記』における「作願門」の解説では、次のように問答を設ける。

問。上<sup>ニ</sup>標<sup>ス</sup>縁理・縁事<sup>一</sup>。今何<sup>ソ</sup>委<sup>ニ</sup>縁理之相<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>委<sup>ニ</sup>縁事<sup>一</sup>。



耶。答。從<sub>レ</sub>勝<sub>ニ</sub>委釋<sub>スル</sub>也。難<sub>シテ</sub>云、序<sub>ニ</sub>ハ云<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>予<sub>ノ</sub>頑魯者豈敢<sub>ト</sub>、觀  
察門ノ初<sub>ニ</sub>ハ云<sub>ニ</sub>初<sub>ニ</sub>心行者不堪深奧<sub>ト</sub>。尤<sub>モ</sub>釋<sub>シテ</sub>緣事ヲ可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>初<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>。何  
ッ念佛ハ勸<sub>レ</sub>事<sub>ヲ</sub>菩提心ハ先<sub>ニ</sub>スルヤ<sub>ヲ</sub>。理<sub>ヲ</sub>。答。緣事ハ易<sub>レ</sub>解<sub>シ</sub>。故<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>設<sub>ケ</sub>廣  
釋<sub>ヲ</sub>、緣理ハ難<sub>レ</sub>解<sub>シ</sub>故<sub>ニ</sub>、設<sub>ニ</sub>委釋<sub>ヲ</sub>也。或<sub>ハ</sub>若<sub>シ</sub>論<sub>レ</sub>法<sub>ヲ</sub>、理ハ勝<sub>レ</sub>事ハ  
劣<sub>ル</sub>。故<sub>ニ</sub>理<sub>ヲ</sub>可<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>本意<sub>ト</sub>。若<sub>シ</sub>約<sub>セ</sub>下<sub>ニ</sub>機<sub>ニ</sub>、緣事ヲ可<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>本意<sub>ト</sub>。  
順<sub>レ</sub>機<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>。兩所ノ釋約<sub>ニ</sub>シテ二機<sub>ニ</sub>影略互顯<sub>スル</sub>也。<sup>(32)</sup>

ここでは『往生要集』において理の菩提心が詳しく述べられている  
ことについて問い、理の菩提心の方が事の菩提心よりも勝れているか  
らだと答えるが、それでは、源信の菩提心に対する態度は、念仏に対  
する態度と異なっているのではないかと非難する。つまり、『往生要  
集』の序文では「如<sub>キ</sub>予<sub>カ</sub>頑魯之者豈敢<sub>センヤ</sub>」と述べ、また大文第四正  
修念仏の「觀察門」の初めには「初<sub>ニ</sub>心ノ觀行ハ不堪<sub>ニ</sub>深奧<sub>ニ</sub>」<sup>(34)</sup>と説いて  
おり、源信は勝劣ではなく難易という観点から、易行を勧める立場で  
あり、念仏については理觀ではなく事觀を勧めている。このことから  
すると、当然、易行である事の菩提心を解釈して初心の行者のために  
説くべきなのである。ところが『往生要集』では、菩提心については  
事でなく理の菩提心を優先させて詳しく説いている。それはなぜなの  
かと問うのである。この答えとして、緣事の菩提心は理解し易く緣理  
の菩提心は理解し難いからだと述べる。また或は、教えの勝劣という  
観点で解釈すると、理の菩提心は勝れている故に本意として説き、往  
生する機根という観点で解釈すると、事の菩提心は機根の劣った者に  
適う故に本意として説くのだとする。上根下機各々に対する教えの適  
否については、二つの解釈が互いに補完し合う形となっているのであ

る。

つまり、念仏に関して易行である事觀を勧めるのに合わせて、菩提  
心に関しても理ではなく事の菩提心を勧めるべきだという解釈を述べ  
るのである。そして事の菩提心は機根の劣った者の往生のための行だ  
と論じる。先に示したように、易行である称名念仏を選ぶのに準じて  
理の菩提心ではなく事の菩提心を選ぶというのは法然の「惣結要行B  
釈」の説であり、『義記』のこの解説は法然の菩提心に対する解釈と  
同じ論理を用いているのである。ただし法然の解釈では『往生要集』  
の文脈に依らずに事の菩提心を往生の要だとしており、それでは何  
故、『往生要集』では理の菩提心に重点が置かれているのかが明確で  
はなかった。『義記』におけるこの説示は、『往生要集』で説かれる菩  
提心について、事の菩提心が凡夫の往生に適したものであることを示  
すとともに、理の菩提心が優先して説かれる理由を補足している。つ  
まり、法然の解釈を念頭において法然の説示に合わせた解説を行って  
いると考えられる。『義記』における本説示は、法然の言葉を直接引  
用していないが法然の解釈と合致しており、そこから、法然の『往生  
要集』解釈がそのまま受容されていることを読み取ることができるの  
である。

## 第二章、「惣結要行」における菩提心解釈

### 第一節、『往生要集』における説示

「惣結要行」は『往生要集』の大文第五助念方法において説かれる  
説示で、以下のように「往生の要」についてのまとめを説くものであ

る。

問。上ノ諸門ノ中ニ所レ陳ル既多ケレトモ、未レ知何シノ業カ爲コトヲ往生ノ

要ト。答。大菩提心ト、護<sub>レ</sub>三業<sub>一</sub>、深信シ、至<sub>レ</sub>誠、常ニ念<sub>レ</sub>佛、隨<sub>レ</sub>願、決定シテ生<sub>ニ</sub>極樂<sub>一</sub>。<sup>(35)</sup>

すなわち、「往生の要」は何かという問に対して、①大菩提心と②三業を護ることと③深く信じ④誠を至して⑤常に⑥仏を念ずるならば⑦願に随って、決定して極樂に往生するという七法を答えるのである。

## 第二節、法然の「惣結要行」解釈

法然は「惣結要行」に関して、四積書において二通りの解釈を述べている。

まず一つ目は、『往生要集』に説かれる「略」の解釈であり、先に挙げた「惣結要行B釈」と区別して林田氏は「惣結要行A釈」と呼んでいる。この解釈は、『往生要集』の「惣結要行」における七法は『往生要集』の正意ではないという解釈であり、『往生要集』で以下のように説かれる。

云フ大菩提心、護三業、深信、至誠、常、念佛、隨願、決定往生極樂ト。此レ尚准<sub>レ</sub>問ニ雖<sub>レ</sub>尋<sub>ニ</sub>要否<sub>一</sub>、是且助念門ノ意ナリ也。非<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>集ノ正意<sub>一</sub>也。問。何以得<sub>レ</sub>知コト、非<sub>ニ</sub>正意<sub>一</sub>乎。答。止惡修善ノ中ニ云ク、「問。念佛スレハ且クミ自滅<sub>レ</sub>罪、何必<sub>ニ</sub>堅持<sub>一</sub>戒ヲ。答。一心ニ念<sub>ニ</sub>誠<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>所責<sub>一</sub>。然<sub>ニ</sub>盡<sub>一</sub>日ニ念佛シテ閑<sub>ニ</sub>檢<sub>一</sub>其ノ實<sub>一</sub>、淨心ハ一兩、其餘皆<sub>ナ</sub>濁<sub>ナリ</sub>。乃至是故ニ要<sub>ス</sub>當<sub>ニ</sub>精<sub>一</sub>

進<sub>ニ</sub>持<sub>一</sub>淨戒ヲ猶如<sub>レ</sub>護<sub>ル</sub>明珠<sub>上</sub>。故<sub>ニ</sub>知<sub>一</sub>ス、如<sub>レ</sub>說ニ念佛セハ必<sub>ニ</sub>モ不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>具<sub>ニ</sub>持戒等<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>此<sub>一</sub>言<sub>ニ</sub>略<sub>一</sub>ト也。<sup>(36)</sup>

『往生要集』では「往生の要」について①大菩提心と、②三業を護ることと、③深く信じ、④誠を至して⑤常に⑥仏を念ずるならば、⑦願に随って、決定して極樂に往生すると説いている。しかしこれは、「往生の要」は何かという問に応じてとりあえずこの七法を選んでるのであり、それは助念門の意図であって『往生要集』全体の正意ではないとする。さらに続けて、そのように解釈する理由について一心に念仏すれば罪を滅するという『往生要集』の「止惡修善」の文言を引用し、持戒等は往生の必須条件ではないとするのである。

次に、法然の「惣結要行」に関する二つ目の解釈は、前章において既に述べたが「惣結要行B釈」と呼ばれるものである。この解釈は、『往生要集』の「惣結要行」における七法は『往生要集』の正意であるという解釈であり、『往生要集』で以下のように説かれる。

先ツ發<sub>ニ</sub>緣事<sub>一</sub>ノ大菩提心<sub>一</sub>、次<sub>ニ</sub>持<sub>一</sub>二十重ノ木叉<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>深信<sub>一</sub>至誠<sub>一</sub>、常ニ稱<sub>ニ</sub>彌陀ノ名號<sub>一</sub>、隨<sub>レ</sub>願<sub>ニ</sub>、決定<sub>ニ</sub>得<sub>一</sub>往生<sub>一</sub>。是<sub>レ</sub>則<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>集ノ正意<sub>一</sub>也。<sup>(37)</sup>

つまり、先の「略」の解釈（「惣結要行A釈」と正反対の説示なのである。このように、『往生要集』には相反する二つの「惣結要行」に関する解釈が説かれており、従来からの研究課題とされている。

## 第三節、『往生要集義記』における「惣結要行」の解釈

以上を踏まえて『義記』では「惣結要行」をどのように註釈してい

此段ノ料簡ハ如ニ上人ノ釋<sup>(38)</sup>一。

祖師ノ釋ニ云、付此ノ要集ニ有<sub>二</sub>廣略要<sub>一</sub>。一<sub>ニ</sub>廣<sub>ト</sub>者、此ノ一部三卷<sub>ニ</sub>

有<sub>二</sub>正流通<sub>一</sub>、厭離等ノ十門<sub>一</sub>、束<sub>テ</sub>以<sub>テ</sub>名<sub>レ</sub>廣<sub>ト</sub>。二略<sub>ト</sub>者、總結要行ノ七法是<sub>レ</sub>也。《乃至》此<sub>レ</sub>尚<sub>ホ</sub>準<sub>シテ</sub>問<sub>ニ</sub>雖<sub>レ</sub>レトモ簡<sub>ト</sub>要否<sub>一</sub>、是<sub>レ</sub>且<sub>ク</sub>助念門ノ意也。非<sub>ニ</sub>此<sub>一</sub>ノ集<sub>ノ</sub>正意<sub>ニハ</sub>。所<sub>ニ</sub>以<sub>一</sub>知<sub>ル</sub>者、上<sub>ノ</sub>止惡修善<sub>ノ</sub>中<sub>ニ</sub>云、

「問。念佛<sub>セハ</sub>自<sub>ラ</sub>減<sub>ス</sub>罪<sub>ヲ</sub>、何<sub>ソ</sub>必<sub>シ</sub>モ堅<sub>ク</sub>持<sub>セ</sub>戒<sub>センヤ</sub>。答。若<sub>シ</sub>一心<sub>ニ</sub>念<sub>セハ</sub>」

誠<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>責<sub>ル</sub>。《已上》故<sub>ニ</sub>知<sub>ヌ</sub>、如<sub>レ</sub>說<sub>ニ</sub>念佛<sub>セハ</sub>不<sub>ニ</sub>必<sub>ス</sub>シ<sub>モ</sub>可<sub>ハ</sub>具<sub>ス</sub>持戒等<sub>一</sub>矣。三<sub>ニ</sub>要<sub>ト</sub>者、約<sub>ニ</sub>念佛<sub>一</sub>一行<sub>ニ</sub>勸<sub>進</sub>スル文<sub>ニ</sub>是<sub>レ</sub>也。第四<sub>ニ</sub>正修念佛門<sub>一</sub>ノ中<sub>ノ</sub>觀察門<sub>ニ</sub>云、「初心<sub>ノ</sub>觀行<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>堪<sub>ハ</sub>深奧<sub>ニ</sub>。《乃至》是<sub>ノ</sub>故<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>修<sub>ニ</sub>色相觀<sub>一</sub>。此<sub>ヲ</sub>分<sub>テ</sub>爲<sub>ニ</sub>三<sub>ト</sub>。一<sub>ニハ</sub>別相觀<sub>一</sub>、二<sub>ニハ</sub>總相觀<sub>一</sub>、三<sub>ニハ</sub>雜略觀<sub>一</sub>也。隨<sub>テ</sub>意樂<sub>ニ</sub>應<sub>ニ</sub>用<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。若<sub>シ</sub>有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>堪<sub>ハ</sub>三觀<sub>ニ</sub>念<sub>スル</sub>ニ相好<sub>マ</sub>、或<sub>ハ</sub>依<sub>ニ</sub>歸命想<sub>一</sub>、或<sub>ハ</sub>依<sub>ニ</sub>引接想<sub>一</sub>、或<sub>ハ</sub>依<sub>ニ</sub>往生想<sub>一</sub>、應<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>稱念<sub>ス</sub>。《已上意樂不同故明<sub>ニ</sub>三種觀<sub>一</sub>」行住坐臥、語默作作、常<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>テ此<sub>一</sub>念<sub>ヲ</sub>在<sub>ニ</sub>於胸中<sub>一</sub>、如<sub>ニ</sub>飢<sub>ヘテ</sub>念<sub>フ</sub>カ食<sub>ヲ</sub>、如<sub>ニ</sub>渴<sub>シテ</sub>追<sub>フ</sub>カ水<sub>ヲ</sub>。

意也<sub>ト</sub>可<sub>レ</sub>思。」（已上祖師釋）<sup>40</sup>

『義記』ではこの後、「有云」と言い、ある者の主張としての解釈を述べてそれについて解説する。ある者の主張とは次のような解釈である。

有云、於三七法ノ中ニ猶除テ護三業ヲ、以テ餘ノ六法ヲ爲ニ要中ノ要ト。即チ集ノ文ニ云、「問。念佛ハ自ラ滅ス罪ヲ、何ソ必ス堅ク持ケン戒ヲ。答。若シ一心ニ念ニ誠ニ如所ノ責ル。」（云云）今云、此亦不然ラ、猶可シ除ク苦提心一也。<sup>41</sup>

つまり、「惣結要行」において選ばれる七法（①大菩提心と②三業を護ることと③深く信じ④誠を至して⑤常に⑥仏を念ずるならば⑦願に随つて、決定して極楽に往生するという七法）に関して、『往生要集』の文言を根拠として「護三業」すなわち持戒を除き、持戒を除いた六法が「要の中の要」だとする解釈が挙げられる。これに対し、その主張は妥当ではなく、菩提心も除くべきであると反論する。

ここで「有云」として挙げられる主張は、上記の法然の引用と同じく持戒の要否を示す『往生要集』の文言を根拠とする点から、法然の『往生要集』との関連性が窺える。というのも、この主張は法然の「略」の解釈（「惣結要行A釈」）に関連して生じ得る内容だからである。すなわち、『義記』に引用されているように法然は、まず「略」の解釈において「惣結要行」の七法が『往生要集』全体の正意ではないとし、続く「要」の解釈において念仏を勧進することが『往生要集』の本意だとする。この時、「略」の解釈で七法が正意ではないと解釈する根拠は、『往生要集』の「必ずしも持戒を修せずとも一心に念仏すれば罪を滅する」という説示である。ここで注目すべきは、法然が根拠として挙げているのは持戒に関する文言のみであり、「惣結要行」で選ばれる七法の中には他に例えば菩提心といった行も含まれるという点である。その『往生要集』の文言が指すのは持戒の要否の

みであり、その他の六法について法然は根拠を示して言及している訳でないのである。法然の解釈の通り持戒が往生の必須条件でないことを示すことにより「七法」は成立しなくなるのだが、持戒以外の六法が往生のために重要であることは変わりない。それ故、『往生要集』の文言に基づいて、七法の中の持戒のみを除く六法が「要中の要」だという主張が生じ得るのである。

この主張は「略」の解釈で法然が自身の解釈の根拠として用いる『往生要集』の文言と同じ箇所を根拠としているため、「略」の解釈は、「七法が『往生要集』全体の正意でない」ということを示すとともに、「持戒を除く六法が〈要中の要〉だ」という主張をも生じさせ得るのである。そうすると、法然は「要」の解釈において念仏の一行を勧めることが『往生要集』の本意であるとしているのであるから、「略」の解釈と「要」の解釈とは矛盾するのではないかという疑義が生じる。『義記』における上記（「有云」）の主張とそれに対する反論はこのような疑問を解消する意図が窺えるのである。

『義記』では続けて次のように説く。

故ニ祖師料簡ニ引テ上ノ文ヲ、云下ヘリ故ニ知ヌ、如説ニ念佛セハ不中スシモ可也具ニ持戒等一ヲ矣。〈已上〉所ノ言「等」者、等取スル菩提心一也。何ヲ以テ得ル知ルコトヲ。作願門ニ云、「問。若シ不ニ發願者ハ、終ニ不ニ往生セ耶。答。諸師不同ナリ。有云、九品生ノ人皆發ス菩提心一。云云慈恩同レ之」有云、中下品ハ但由三福分ニ生ス。上品ハ具ニテ福分ト道分トヲ生ス。〈云云〉道分ト者是レ菩提心ノ行也。問。如ニ菩提心ニ諸師ノ異解アルカ、欣ニ淨土一ヲ心モ亦不同ナル耶。答。大菩提心ニハ雖レトモ有ニ異説、欣淨



土之願ハ九品皆ナ應レ具ス。」〈已上〉是レ除ニ菩提心ヲ之證也。<sup>(42)</sup>

つまり、法然の解釈では「持戒等」が往生の必須条件ではないと述べており、「等」の語には菩提心が含まれ、持戒と同様に菩提心もまた「往生の要」から除くということである。その根拠として『往生要集』大文第四正修念仏の「作願門」に説かれる次のような説示を挙げる。すなわち、発願しない者は往生しないのかという問に対して、諸師の解釈は一樣ではないと答える。その例として、『観無量寿経』の中品・下品の者は福分（世間的な功德）によって往生し、上品の者は福分と道分（出世間的な功德）を具えて往生するのだという主張である。道分とは菩提心の行である。つまり、中品・下品の者のように、必ずしも菩提心の行がなくとも往生するということである。そしてこれが、菩提心を往生の必須条件から除く証拠であるとする。

このように、持戒は往生の必須条件ではないとする『往生要集』の文言を根拠として、法然が「物結要行」の七法は『往生要集』全体の正意ではないと解釈したことを踏まえて、『義記』ではその解釈に対する疑義を解消するように、菩提心もまた往生の必須条件ではないという解説を行っていると考えられる。<sup>(43)</sup>これは、法然の解釈に対して、その解釈を受容した上で、法然が文言上説いていない菩提心の要否について、問答を設けることで補足を行っていると言える。

更に、これまで挙げた説示から次の点も指摘することができる。すなわち、『義記』においては、『往生要集』の「物結要行」に関する法然の二通りの解釈の中、その両方を受容しているということである。「物結要行」における法然の二通りの解釈は先に示した通りであり、

第一章で見たように大文第四正修念仏の「作願門」における菩提心についての『義記』での解説は「惣結要行B釈」の内容を踏まえた説示であった。一方、本節で示したように『義記』の冒頭で引用されるのは「略」の解釈（「惣結要行A釈」）なのである。

法然の二通りの「惣結要行」の解釈は互いに正反対の主張であって、本来、同一の書物に説かれるものではないだろう。<sup>(44)</sup>しかし『義記』は、その二通りの中、片方のみを受容してもう片方は完全に排除するといった態度を取らないと言える。冒頭で「惣結要行A釈」の立場を説き、それに対して大文第四正修念仏の「作願門」の解説においては「惣結要行B釈」に説かれる菩提心の解釈を説き、大文第五助念方法の「物結要行」を解説する段落では法然の解釈の通りだとするのである。これは何を意味するのであろうか。「惣結要行」は往生のためには念仏の他に持戒や菩提心等を加えた七法を修すべきだと説くものであるから、専修念仏を説く法然にとって、「惣結要行A釈」はまさに、『往生要集』と法然が説く念仏が同じであることを示すものであり、それに対して、「惣結要行B釈」は『往生要集』と法然が説く念仏は異なることを示すものである。本検討で示した説示を見る限りでは、「惣結要行A釈」を基本としながらも、菩提心の解釈を含む「惣結要行B釈」を完全に排除はしないという立場である。それは法然の『往生要集』解釈の複雑さを表すものであり、坂田良弘氏が「要集に明かす念佛は頗る複雑であつて、その眞意を把握することは容易でないのである」と述べるように、<sup>(45)</sup>『往生要集』の理解もまた単純ではないということを示すものである。

## まとめ

これまでの検討をまとめる。

①『往生要集』の「作願門」では理の菩提心に重点が置かれているが、『義記』ではその理由を教えの勝劣に依るからだとし、一方で機根が劣った者の往生という観点では事の菩提心を本意とするのだと解説する。これは理と事の菩提心の中では事の菩提心を往生の要だとする法然の解釈に基づいて述べられたものだと考えられる。

②『義記』では「物結要行」の七法の中、持戒だけでなく菩提心も往生の必須条件ではないと解説する。このような解説の背景には七法が『往生要集』全体の正意ではないとする法然の解釈が窺える。

上記の箇所では法然の直接の引用がなくとも法然の『往生要集』解釈を踏まえて法然の立場を補足しており、良忠が法然の『往生要集』解釈を継承しその理解をより深めようとする姿勢が見てとれる。『義記』のさらなる理解には、このような直接の引用がない箇所についても法然の解釈を考慮していくべきだと言える。

## 〔注〕

(1) 坂田良弘「往生要集の念仏」（『浄土学』第二一輯、浄土学研究会、一九四六年）一三頁では「我が宗學者は、古今を通じて此の考察を缺いて居る、従つて恵心の浄土學に精通する學者も乏しく、それに對する著作も少ないのである。之れに反し眞宗に於ては恵心を第六祖に列するほど重視して居る宗學の建前から、其の研究も深位に進められて居るやうである」と指摘されている。

- (2) 例えば、福原隆善「法然における源信教學の受容と展開」（『佛教大学総合研究所紀要』別冊「法然浄土教の総合的研究」、佛教大学総合研究所、二〇〇二年）や南宏信「法然「八種選択義」の淵源——『往生要集』から「選択集」へ——」（『浄土宗学研究』第四一号、知恩院浄土宗学研究、二〇一五年）等の研究が挙げられる。
- (3) 例えば、石井教道氏は法然の思想変遷を三段（浅劣念仏期、本願念仏期、選択念仏期）に分け、『往生要集』の四積書の成立時期を浅劣念仏期に当てている（石井教道『昭和新修法然上人全集』（第三刷）（平楽寺書店、一九七九年）序五頁）。
- (4) ただし、良忠の註釈書には『往生要集鈔』と題される書物も存在し、『往生要集鈔』から『義記』へと増補・再編集がなされていたとされる（南宏信「良忠撰『往生要集』注釈書の成立過程」（『佛教大学総合研究所編「法然上人八〇〇年大遠忌記念 法然仏教とその可能性」佛教大学、二〇一二年）七五二頁）。そのため、本稿では検討箇所における『往生要集鈔』との異同も考慮する。
- (5) 浄土宗鎮西派における『往生要集』の注釈書として、この他に廓瑩（一六九五）の『往生要集指麾鈔』が挙げられる。
- (6) 大谷旭雄「『往生要集義記』について」（『浄土学』第三六輯、大正大学浄土学研究会、一九八五年）一七八頁。
- (7) 大谷旭雄「『往生要集義記』について」（『浄土学』第三六輯、大正大学浄土学研究会、一九八五年）一七七頁。
- (8) 南宏信「『往生要集』の構成について」（『佛教大学大学院紀要』第三五号、佛教大学大学院、二〇〇七年）二六頁。
- (9) 那須一雄「弁長・良忠における『往生要集』理解について」（『印度学仏教学研究』第五五卷第二号、日本印度学仏教学会、二〇〇七年）一八三頁。
- (10) 『浄全』一・二五一頁・下十五行を指す。ただし、『往生要集』では『浄土論』として挙げられている。
- (11) 『浄全』十五・六九頁・下十一行。
- (12) 『浄全』十五・六九頁・下十五行。

- (13) 衆生の数に限りはないが誓って全て救いとうろうという願。  
(14) 煩惱の数に限りはないが誓って全て断ち切ろうという願。  
(15) 教えは無数にあるが誓って全て知り尽くそうという願。  
(16) この上ないさとりを誓って証得しようという願。

- (17) 『往生要集』では「言ハ縁スル事四弘ト者、一ニハ衆生無邊誓願度。應ニ念ス。一切衆生ニ悉有ニ佛性一。我、皆、令レトス入ラ無餘涅槃ニ。此心、即是、饒益有情戒ナリ。亦、是、恩徳ノ心ナリ。亦、是、縁因佛性ニシテ、應身ノ菩提ノ因ナリ。二ニハ煩惱無邊誓願斷。此是、攝律儀戒ナリ。亦、是、斷徳ノ心ナリ。亦、是、正因仏性ニシテ、法身ノ菩提ノ因ナリ。三ニハ法門無盡誓願知。此是、攝善法戒ナリ。亦、是、智徳ノ心ナリ。亦、是、了因佛性ニシテ、報身ノ菩提ノ因ナリ。四ニハ無上菩提誓願證。此ハ是、願ニ求ス佛果菩提一ト謂、由具ニ足スルニ前三ノ行願一、證ニ得シ三身圓滿ノ菩提一、還亦、廣ク度セントス一切ノ衆生一」(『浄全』十五・七〇頁・上一行)と説かれる。
- (18) 『往生要集』では「二ニ縁レノ理願ト者、一切ノ諸法ハ本來寂靜ニシテ、非レ有ニ、非レ無ニ、非レ常ニ、非レ斷ニ、不生ニ、不滅ニ、不垢ニ、不淨ニ。一色一香無シ非ニ中道ニ。生死即涅槃、煩惱即菩提一。翻セハ一一ノ塵勞門一、即是、八萬四千ノ諸波羅蜜ナリ。無明ヲ變シテ爲ハ明ト、如ク融シテ氷ヲ成スカト、更ニ非ニ遠物ニ。不ニ餘處ヨリキ一。但タ一念ノ心ニ普ク皆具足。如下如意珠、非レ有ルニ寶、非レ無キニ寶。若シ謂ハ無ト者、即チ妄語ナリ。若シ謂ハ有ト者、即チ邪見ナリ。不レ可ニ以レ心ヲ知一。不レ可ニ以レ言ヲ辨一。衆生、於此ノ不思議、不縛ノ法ヲ中ニ而思想シテ縛ヲ、於ニ無脱ノ法ヲ中ニ而求ム於脱一。是故ニ普ク於ニ法界ノ一切衆生ニ、起シ大慈悲一、興ニ四弘誓一。是ヲ名ク順理ノ發心一。是レ最上ノ菩提心一」(『浄全』十五・七〇頁・上一行)と説かれる。

- (19) 『浄全』十五・七〇頁・下一行。  
(20) 『浄全』十五・七一頁・上六行。  
(21) 内容としては、『大智度論』を引用して①「利根ナル者ハ即知ニ是ノ諸法ハ皆是法性一」②「觀ニシテ諸法ノ相無縛無解一」心得ニ清淨ナルコトヲ菩薩ノ教也(中略)姪欲即是道ナリ。悲癡亦如是。如此三事ノ中ニ無量諸佛ノ道一」また③「一切法ノ不可得ナル、是名ニ佛道一。即是レ諸法實相ナ

リ。此不可得亦不可得ナリト」と説き、『涅槃經』を引用して④「一切諸法ノ中ニ悉有ニ安樂ノ性一。唯願ハ大世尊爲ニ我カ分別シテ説ケト」と説き、『般若經』を引用して⑤「一切ノ有性ハ皆如來藏ナリ。普賢菩薩自體偏スルカ故ナリト」と説き、『法句經』を引用して⑥「諸法ハ從レ本來無シ是亦無シ非。是非ノ性ハ寂滅ナルハ本來無シト所動スル」と説いた後、「已上六文は利根人菩提心耳」と割注で締め括っている(『浄全』十五・七一頁・上一行)。

- (22) 『浄全』十五・七一頁・下七行。  
(23) 『浄全』十五・七六頁・上十六行。  
(24) 『往生要集』ではこれに続いて縁事の菩提心に利益があることを複数の用例によつて説明しているが、その数は五例であり、縁理の菩提心の場合とは差異が見られる。
- (25) 林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究」(『印度学仏教学研究』第四四卷第一号、日本印度学仏教学会、一九九五年)一二五頁。本検討においてもこれにならつて「惣結要行A釈」及び「惣結要行B釈」と呼ぶ。
- (26) 『昭法全』一二三頁。ただし、底本としては、大谷大学所蔵である古本『漢語燈錄』所収の『往生要集釈』を扱う。
- (27) 『昭法全』一二三頁。  
(28) 『浄全』十五・八五頁・下七行。  
(29) 『浄全』十五・一二八頁・下十行。  
(30) 『昭法全』一二二頁。  
(31) 末木文美士「初期源空の文獻と思想―『往生要集』釈書を中心に―」(『南都仏教』第三七号、南都仏教研究会、一九七六年)五五頁。  
(32) 『浄全』十五・二五五頁・上八行。なお、より古い形態を保っている尊経閣文庫所蔵『往生要集鈔』においても同様の内容が説かれる。  
(33) 『浄全』十五・三七頁・上五行。  
(34) 『浄全』十五・七九頁・上三行。  
(35) 『浄全』十五・一〇八頁・上一行。ただし「要」となつている送り仮名を諸本に依つて「要ト」とした。

- (36) 『昭法全』二二頁。
- (37) 『昭法全』一三三頁。
- (38) 『浄全』十五・三〇二頁・下八行。なお尊経閣文庫所蔵『往生要集鈔』においても同様の内容が説かれる。
- (39) ただし、先の引用に続いて「但<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>諍論<sup>事ナリ</sup>」と説かれ、良忠在世の頃から「惣結要行」に対する論争があったことは南氏がすでに指摘している（南宏信「『往生要集』の構成について」（『佛教大学大学院紀要』第三五号、佛教大学大学院、二〇〇七年）二六頁）。
- (40) 『浄全』十五・一五八頁・下十二行。なお尊経閣文庫所蔵『往生要集鈔』においても同様の内容が説かれる。
- (41) 『浄全』十五・一五九頁・下十三行。なお尊経閣文庫所蔵『往生要集鈔』においても同様の内容が説かれる。
- (42) 『浄全』十五・一五九頁・下十六行。なお尊経閣文庫所蔵『往生要集鈔』においても同様の内容が説かれる。
- (43) ただし、法然の解釈が不十分であるから『義記』において解説を必要としたというわけではないだろう。大文第五助念方法の「惣結要行」における解説については、本文でも触れたように、法然の釈の通りだと述べており、疑義や修正を加えることはない。またこの説示で『義記』に引用される法然の「広」・「略」・「要」の解釈は、全文ではなく一部を抜粋したものであり、さらに法然の『往生要集釈』ではこの他に「開」・「合」の解釈等も説かれており、それら全てを含めて法然の解釈だと言える。筆者は「合」・「広」・「略」・「要」の解釈は密接な関連性をもって構成されていると考えている（拙稿「法然『往生要集釈』における合・広・略・要の関連性」（『佛教大学大学院紀要』第四八号、佛教大学大学院、二〇二〇年）十一頁）。良忠が法然の解釈の一部だけを取り上げて不十分だとして解説するとは考えられず、ここでは、法然の解釈の一部分に対して生じる疑義を解説するため、必要な箇所のみを引用したであろう。
- (44) 同一の書物に正反対の主張が説かれると、当然、論理に矛盾が生じる。そのため林田氏は、二通りの「惣結要行」の解釈の中、その両方が説かれている『往生要集釈』に関して、「惣結要行B釈」は後世の加筆だと論じている（林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究」（『印度学仏教学研究』第四四卷第一号、日本印度学仏教学会、一九九五年）一二四頁。またこの論に先立って平雅行氏が『日本中世の社会と仏教』（塙書房、一九九二年）二〇八頁の註において、論証はされていないが、加筆増補であると指摘している）。
- (45) 坂田良弘「往生要集の念仏」（『浄土学』第二二輯、浄土学研究会、一九四六年）三四頁。

（しもばた けいすけ 文学研究科仏教学専攻博士後期課程）

（指導教員・本庄 良文 教授）

二〇二〇年九月二十八日受理